ボーイスカウト東京第四団

機関紙

No. 81

Sept. 1, 1967

# スマイル

## 友情に支えられて

副団委員長　杉原　正

ロスアンゼルスを朝はやく発ち、ヨセミテ国立公園に着いた。夜更けて一人のスカウトから聞いた話は、美しいヨセミテの夜景と共に忘れることはできない。

ロスアンゼルスでは、才一隊（東京隊）は日系の方々の家庭で三日間御世話になった。ドジャース球場での野球、ディズニーランドでの楽しい一日、日本街での日本食、数限りない接待を我々はうけた。しかし、そのスカウトは違っていた。彼らをホスト（招待）してくれたのは、メヒコと呼ばれるメキシコ系のスカウトの家庭であった。家庭は貧しいらしく家具と称されるようなものは少なく、食事も毎回、タコスと呼ばれる粗末なものであった。最後の日の朝、お別れのご馳走で、ホットケーキとミルクを出してくれたという、バスに乗って隊から支給された日本弁当をみたとき、思わず涙がでたという。他のスカウトは、すし、てんぷら、うなぎ、ソーメンと日系の方々のご好意によるご馳走について字頂点になって話していた。

話を戻す。彼はメヒコの家にいったとき日本の礼に従って、おみやげをスカウトに渡した。ホストをしてくれたスカウトは、しばらく考えてから自分のしていたチーフリングをはずして彼にくれたそうである。それは宝石のとれた指輪をうら返しにして使っていたものであった。翌日、そのスカウトのネッカチーフは、しばってあるだけだった。ネッカチーフも、ユニフォームもたった一つのものを一つ彼にくれたのである。

ディズニーランドへも連れていってくれた。一人約二千円する切符を買ってくれた。メヒコのスカウト達が、僅かな小遣いの中から、持っているものをすべて、何セントかづつ出し合って買ったのである。代表のスカウトを案内役とし、大部分のスカウトは、入口の前で彼らが帰ってくるのを待っていたそうである。とても暑い。見物の途中で喉がかわいた。コーラなどを売っている。自分は小遣いをもっていた。買って飲みたい、しかし、買うことはできなかったと言う。水飲み場があると、皆、そこえ走った。話している彼の眼にキラリと光るものがあった。最後の日、彼はメヒコに日本街でヤキトリをご馳走した。そして自分の持っているおみやげは、全部、そこのスカウト達に置いてきたそうである。日系の方々が、我々を歓迎してくれるのは、当り前かもしれない。しかし、多勢いる日系の方々の中に混ってメヒコは我々をホストしてくれたのである。日系の方々も、もっとホストしたいと言ってくれていた。しかし、

メヒコは、貧しさの中で遠来の友を迎えてくれた。すべてのことを犠牲にして……。日本人だったら、日本だったら僕達は、同じようにホストしたかな……。よんであげたい。日本での第十三回世界ジャンボリーに。メヒコを。お互いの眼から落ちてゆくものが……。ほんとうにあつく感じられた。

## 考える力

年少隊々長　大島啓義

私達の周囲には、テレビ、ラジオ、映画、新聞、雑誌といったような、非常に多くの通信機関があります。テレビ、ラジオ、新聞などは、その日に起きたニュースや、世界の出来事を正確に、早く伝えてくれます。またそれは、今流行している音楽、スタイル、ことばといったような、私達の身近な所まで入りこんでいます。私達はこのような中で生活をしていると、しらない間に、この通信機関を通じて、テレビやラジオのニュース解説的な考え方、つまりでき上っている考え方、他人の見方といったものに頼ってしまったり、わけもわからず他人の意見に賛成してしまったりすることが多いのではないでしょうか。

私達は皆、顔やことばが違うように、それぞれ考える力をもっています。もちろん自分の考え方を押すのだからといって、むりやりに人に押しつけるというのではなく、人の意見も尊重して考える事が大切です。私達は社会生活の一員なのですから。

そこでまず、物事を行なったり、考える場合には、自分の考えをまとめた上で、他の人だったら自分の考えをどう思うだろうかと、再度考えてみることが必要であると思います。スカウティングは団体生活を通して行なわれますが、その中ではたえず自分一人ではなく、他の人の事も念頭におかなくてはなりません。スカウティングは日常生活と異なり、同年代の人が集っているので、意見の衝突がたびたびあると思います。その中でよく検討された意見というものは貴重なものですが、その場合にはその意見が最上のものではなく、違う年代のスカウト、成人が多勢いるという事を忘れてはなりません。つまりいつでも、第三者の目、考え方というものがあって皆自分達を見ているのだということです。

スカウティングの標語の中にルック・ワイド（広く見よう）ということばがありますが、私達ももっと大きな目と気持をもって、物事を考えようではありませんか！

## ボーイスカウトの進級課目について

少年隊々長　柳　健一

スカウト諸君、私達の進級課目の中に、縄結びや、手旗、火起こし、救急法、等々の進級課目を持っているのはなぜだろう？と考えてみた事がありますか？

実際、私達が訓練している。手旗や縄結び等は、それ自体は社会人になって、役に立つ事は、まずありません。そんなに役に立たないものを、なぜ毎週訓練するのでしょう？

それは、あの進級課目には二つの大きな意味があるからです。

一つは、あの進級課目を訓練する事によって、より良いキャンパーになる事を目指す事です。よいキャンプが出来るスカウトは、それだけ大自然の中に深く入って行く事が出来、自然から豊かな心を吸収する事が出来るからです。

もう一つの意味は、初級から2級、1級と進級して行く間に、目的とそこへ到達する段階がある事を学び、体得する事です。スカウト諸君が諸君の毎日毎日に目的を、自分で定めて、それに到達する方法を自分で見つけて行く事が出来るようになる事をこの進級課目で学ぶのです。

以上二つの目的を決して忘れないようにしてほしい。ボーイスカウトは、娯楽クラブではありません。楽しい集会のプログラムの裏には、この二つの目的がいつも関係している事を知ってほしい。そして、目的へ進めるように、スカウト諸君が、お互いにみがき合ってほしい。だらだらした、なれ合いムードに決してなってほしくない。以上が再び隊長になっての スカウト諸君への希望です。とにかく、良い団を作りましょう！

## キャンプの終りに

年長隊々長　日下部　英　一

夏休みも終わり、スカウト諸君にとっては、新しい学期と、スカウトとしての上進の季節でもあります。

スカウト諸君は、この夏休みにキャンプ生活という、ただ土曜日に会っていただけのスカウトが、一緒に御飯を食べ、そして元気良くスカウティングをし、一緒に眠るという、いつもと違った生活の中に、日頃親しまなかったスカウトとも友達になれ、お互いにより良く知ることができたと思います。

そしてキャンプ生活の中で、この涼しい秋を迎え、もう一度、自分は本当にスカウトとして、団体行動をとり、自分勝手な行動をしなかったかということも、心の中で自分に聞いてみて下さい。そしてもし反省することがあったなら、今から直ぐに、来年のキャンプに備えてなおす様に心掛けて欲しいと思います。

最後に、土曜日の集会を見て、お互いのスカウトが元気に敬礼し、挨拶し合うことが少し欠けていると思います。

教会にいるスカウトでない人も、スカウトのお客様かもしれないし、そうでなくとも気持ち良く挨拶する様お互いに努力しましょう。

## 上　進　式

九月四日合同キャンプファイヤーの前に上進式が行なわれました。上進者は次の通りです。

年少隊から少年隊へ

梅垣正興　梅垣克輔　小沢　稔
小松忠和　小林　裕　楠原正俊
中村一也　平林厚幸　三島完治

少年隊から年長隊へ

今井哲哉　宇田川渉明　川島正次
柏木幸夫　小松正太郎　盛田英夫
鷲崎文彦

年長隊から青年隊へ

遠藤正紀　金森宗登夫　北原陽介
馬場英華

## 報　告

＝新年会＝　一月二十一日　於赤坂敬老館
リーダーと父兄との懇親会。出席者は三十名、リーダー十二名。

＝団委員会＝　一月二十八日　出席者九名
一、リーダー継続の件
一、年間プログラム

＝父兄総会＝　三月四日　出席者父兄三十九名。
海外派遣費に関して
登録費の件（五〇〇円に値上げ）
新年度団委員選出

＝団委員会＝　三月四日　出席者十六名。
一、指導者人事（退隊希望者の後任問題）
一、ローバーとリーダー兼任に関して

＝団委員会＝　五月三十日　出席者十三名
一、バザーに関して
式典、祝会に引き続きお茶の会が持たれた。
現役スカウト、リーダー、父兄はもとより

礼拝堂一杯になるほどのお客様、ＯＢをむかえて盛大に祝われた。

**＝二十周年記念＝** 四月二十九日

**＝スカウトバザー＝** 六月二十五日

**＝父兄総会＝** 七月三日

夏期キャンプの件

指導者変動の件

杉原副団委員長米国ジャンボリー参加の件

総会後、旧指導者への感謝の会と新指導者歓迎会が待たれた。

指導者の変動は次の通りです。

| | 新任 | 退任 |
|---|---|---|
| 年少隊々長 | 大島啓義 | 万石俊夫 |
| 副長 | 内藤正樹 | 高橋恒久 |
| デンマザー | 長谷川泉 | 増田純子 |
| | 野口美知子 | 渡辺和子 |
| | 中野啓子 | 鈴木徳子 |
| | 丸山和子 | 伊藤洋子 |
| 少年隊々長 | 柳　健一 | 関口敦夫 |
| 副長 | 大内　丘 | 戸田健次郎 |
| | 白井純一 | |
| 副長補 | 辻　啓一 | 沢田明旁 |
| 年長隊々長 | 日下部英一 | 杉原　正 |
| 副長 | 百塚健一 | 大浜良友 |
| | 佐藤　洋 | |
| | 渡辺　誠 | |

**＝団会議＝** 七月八日　出席者十八名。

一、夏期キャンプに関して

一、団名簿作成（九月発刊、青年隊奉仕）

**＝団委員会＝** 七月十五日　出席者十五名。

一、各隊会計決定（年少・伊藤、少年・竜、年長・百塚隊員、団・宇田川、美藤。

一、ネッカチーフを新たにつくる件

**＝杉原副団委員長出発＝**

アメリカで開かれた、ジャンボリー参加のため七月二十八日出発し八月二十八日無事お帰りになりました。

**＝各隊夏期キャンプ＝**

くわしくは次号に報告いたします。

**＝リーダー研修会＝** 八月十八日～二十日

出席者ＢＳ十二名、ＧＳ七名。リーダーのあり方についてが討議されました。

**＝合同キャンプファイヤー＝** 九月二日

恒例の夏最後の行事が父兄をまじえて楽しく開かれました。

## ジャンボリー　スナップより(1)

あわや切腹か！

ジャンボリーが終了した翌日、殆んどの隊が、サイトから姿を消した。八月十日、徹夜が済んで、日本ここにあり……の意味で国旗と派遣団旗を、サイトに建てたまま、ずぐ近くの木陰で我々が休んでいた。ふと見ると、国旗がスルスルと降り始めた、親切なサブキャンプのスタッフが降しているのかなと思っていると、今度は、派遣団旗のポールを抜き始めた。これはおかしいと思って、副長補をはじめ、二、三のスカウトが走り出した。あわや一発、国旗、派遣団旗が白昼堂々と盗まれるところであった。相手は、しかも自動車で来ていたのである。相手の名誉のために、その国の名は……。もう一寸、遅かったら、我々指導者は、日本に帰ってこられなかったであろう。いかに今度のテーマが、「友情の為に」であっても……。国旗を狙うとは、さすが大国である。

## ＜編集後記＞

新年号以来、春眠・夏眠をしつづけてしまい本当に申し訳ありません。

リーダーの変動、杉原さんのジャンボリー参加、各隊夏期キャンプとニュースの多い期間でしたが、とりあえず、新任隊長と杉原さんに一筆お願いしました。

これからも楽しく、有意義な機関紙にしたいと張切っています。ヨロシク！

**スマイル**　第八一号
日本ボーイスカウト東京第四団